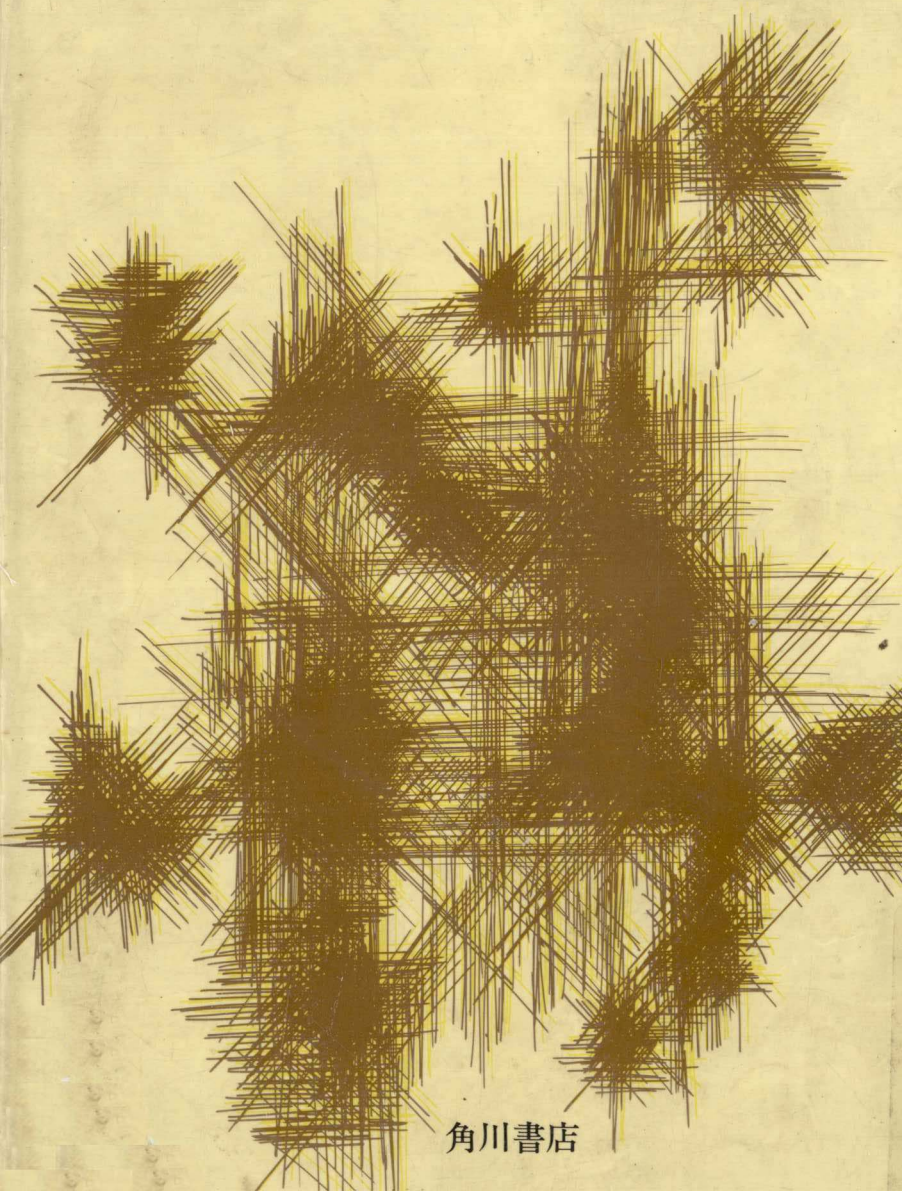
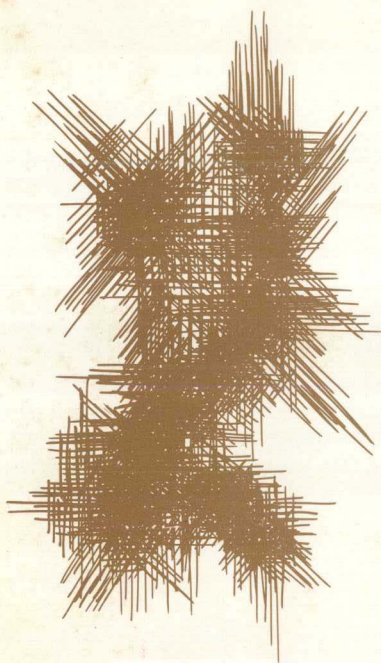


# 翔ぶ影 森内俊雄



角川書店

# 翔ぶ影 森内俊雄



角川書店

もりうちとしお  
森内俊雄

《略歴》

昭和11年 大阪に生まれる

早稲田大学露西亞文学科卒

現住所 東京都豊島区目白町4-25-16

《著書》

作品集「幼き者は驢馬に乗って」(文藝春秋社)

作品集「骨川に行く」(新潮社刊)



翔ぶ影

初版発行

昭和四十七年十月三十日

著者

森内俊雄 ©

発行者

角川源義

発行所

株式会社角川書店

電話

東京都千代田区富士見二ノ十三  
東京(二六五)七一一(大代表)

振替

東京一九五二〇八

郵便番号

一〇二

印刷所

旭印刷株式会社

製本所

株式会社宮田製本所

定価

七八〇円

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

0093-872117-0946(0)

翔

ぶ

影



## 目次

|      |    |
|------|----|
| 駅まで  | 五  |
| 春の往復 | 三  |
| 盲亀   | 二三 |
| 暗い廊下 | 二七 |
| 翔ぶ影  | 一九 |
| 架空索道 | 二三 |

裝  
幀

析折  
久美子

駅  
ま  
で



噛んで含めるように、ゆっくりと話せばあいつだって、分かることだ。桑野はひとりごとを呟きながら会社に出掛ける途中だった。ここ、三日ばかり、強い季節風が町を乱暴に掃くように吹き抜けて、風がやんでみると、透明で氷柱のように冷たい一日が来た。なにもかもが、にわかにはつきりと見えてきた感じだった。桑野は路の曲がり角で、オーバーの襟を立てた。午後一時を過ぎると、陽差は傾き、明るいままで翳りを含み、路地に長く伸びた物蔭にはたそがれの気配が忍び寄っていた。桑野は水溜りを避けて歩くような恰好で、物蔭をよけながら表通りに出てきた。

桑野が会社に午後から出勤するようになって、ひと月ほどたっていた。病院には週二回、注射をしてもらいに通っているが、病名はつかないままにいる。病氣の名前がはっきりしないのは困ったことだった。自分に対してではなく、会社に対して困惑していた。どんなことにでも、なるべくならば簡単明瞭な理由があったほうがいい。ただ〈病氣〉というような抽象名詞は、よくない。たとえば、胃潰瘍とか結核、癌というように誰にでも分かる病氣の顔がなければならなかった。もっとも、会社が桑野に向ってそう言ったわけではない。自分の軀の状態について、しきりに説明をしたがっているの

は桑野のほうだった。それも自分から好んでではなく、説明を求められている、というふうに思い込んでいる。しかし、真底から他人の病気に関心を持つ人はいないものだ。いたとしたら、その人もまた負けず劣らず、どこかが病んでいるに違いない。だから、桑野は実際には、妻の久仁子にさえも、病氣の話はしないでいた。病氣であることをあからさまに告げることに、どこかやましいものを感じてゐた。電車に乗って、座席にわずかな隙間を見付けて、無理に割り込んでどつかと腰を下ろすいやらしさがあると思えた。病氣というものを厄介で気まぐれな訪問客のように考えることが出来なかった。それも確かに自分の状態であるのだから、病氣の責任はとらねばならない。

冬になるまえ、大学時代の友人と久し振りに出会った。おい、桑野、おまえ若くなったようだな、と言われてそのときは、

「よせよ。おれたち、まだそんな言い方をする歳にはなっていないぞ」

と言い返し、お互いに苦笑しながら珈琲を飲んで別れた。苦笑いをしてしまったことで二人とも暗黙に、その歳になつてゐることを認めあつたようなものだった。その日、家に帰ってから桑野は風呂にはいり、鏡を覗いてみて、友人の言葉をもう一度思い出してゐた。なるほどすこし若返つて、学生時代の尖つた鋭い顔になつてゐるのに氣が付いた。暫くは氣をよくしていたが、やがて若く見えるのは痩せてきたせいだ、と知つた。会社の医務室で体重を量てみると、いつのまにか七キロも減つてゐた。仔細に鏡を眺めてみると、顔色も悪く皮膚に衰えがあつた。そのほかには自覚症状はなかつた。痛くも痒くもない。けだるくはあつたが、これは今にはじまつたことではない。どこかが痛むのなら、そのことで氣がまぎれるのだろうか、ただ何事もなく痩せてゆくのは心細いものだった。桑野は会社

の保健医から紹介状を貰い、大学病院に行った。検査の結果は、別段どこも悪くはない、ということだった。まあ、神経過労でしょうな、と医者も診断書に病名を書きあぐねて首をかしげた。体重の減少はいまのところとまっているが、一向に肥る様子はない。しかし、医者がそう言い、自覚症状がないにしても、どこかが悪いのにきまっていた。いわれがなくて痩せることはないだろう。そう思い込んでいることが強いて言えば、自覚症状なのかも知れなかった。わけの分からない病気だったが、病気であることに間違いはない。

病気になったはじめのうちは、桑野の一日が長くなった。桑野の会社は九時に始まり、五時に終わる。が、定刻通りに退社することは滅多にない。大抵、家に帰りつくのは八時か、九時頃になる。そして翌朝の八時には、もう家を出ている。いままで、土曜日以外の週日には、家で夜の時間をくつろいだことがない。悪いことがあれば良いこともある。病気のせいで、会社へは午後から出てゆけばいいようになって、夜が長く豊かになった。夜をゆっくりと過ごせることは楽しいことだった。桑野は、病気になるのも悪くはないなと思ひ出しはじめている自分にふと気が付いて、これがひょっとしたら自分の病気の正体かも知れない、と思ったりした。夜更かしをする悪い習慣がすっかり身についた。夜のあいだ起きていて、朝方に眠りにつき、昼まえに起き出し、会社に行く。そのような生活を物珍しがって楽しんでいたのは最初のうちだけであつた。

日が眼立って短くなりはじめていた。それは季節のせいでもあつた。冬の午後は、明るく晴れていても夕日の翳りと、慌しい夕餉の仕度の匂いとする。昼まえに起き出して、身仕度を整え、表に出た桑野は、朝の出勤の気分であるが、眺めわたす町の景色には首筋に寒いたそがれの気配がみちている。

短い日が翳り急ぐことと、軀の衰えが重なって、桑野は次第に自分が取り残されている、時間の谷川の澱みにはいった、と感じるようになっていた。

桑野は表通りに出ると、賑やかな路を辿って駅のほうに歩いた。車の往来が激しい路を眺めて、すこしほっとしていた。反対側の商店のアーケードは日蔭になっていて、こちら側から見ると暗い河底を覗いているような感じだった。スーパーマーケットの前を通りかかると、よく磨きこまれたガラス窓の店内には客の影がまばらで、入口の脇に店内専用のバスケットが重ねられて、山積みになっている。いつもの習慣だと桑野はスーパーの前から横断歩道を渡り、向側の歩道を歩くのだが、今日に限って、陽の明るい歩道を歩いていった。慣れない明るい道を歩くのに抵抗があった。桑野は眩しい冬陽に逆らっていた。

噛んで含めるように、ゆっくりと話せばいいんだ。桑野はまたひとりごとを呟いてみてから気が付き、おれはこれを、いったい誰に向かって言っているつもりなのだろう、と眼をあげた。小学校二年生になる長男の務が、近所の同級生と連れ立って、この道を辿って帰ってくる時間だった。務の小学校は駅前の陸橋を渡り、歩道橋をくぐり抜けて少し行ったところにあった。いち早く校門を飛び出してきたらしい、子供たちの一群が、桑野を流れに立っている棒杭のように両脇によけて通り過ぎていった。務はそこにはいなかった。桑野は妻の久仁子がいないところで、子供とゆっくり話がしてみたかった。妻がいては困るような理由があるわけではなかった。ただ、無性に子供と二人きりで話をしたくなっていた。ところがそう思ってみると、意外に子供と話をする機会がないことに気が付いた。

務は桑野が寝ているあいだに学校に行ってしまうし、桑野が帰ってくる時間には、そろそろ寝仕度をはじめている。日曜日は、桑野が朝寝坊をするし、午後は、おやじというものは遊び相手にならないと見切りをつけたのか、子供がひとりで表に飛び出してしまっていて、夕方まで帰ってこない。たまに、桑野が起き出してくると、務が玄関先で自転車を表に引き出そうとしている日曜日の朝があった。おい、一緒に散歩に行こうか、と声を掛けると務は桑野が当惑するほど正直に、値踏みをするような顔になった。父を避けているところがあつた。桑野が子供と話をしてみたい、と考えるようになったのは、会社で午後から出掛けるようになってからであつた。それまでは子供を、遠くから見ている氣持だつた。いまは久仁子にまかしておけばいいんだ、と思つていた。氣持が働かなかつたのではなかつた。桑野には子供のそばにいるときより、家を留守にしている間、たとえば会社で仕事をしていたり、出張に出掛けた旅先でいるとき、まったく不意に務のことが妙に切なく氣懸りになつて途惑つた覚えが、しばしばある。子供を遠くにおいて見ているという氣持のなかには、まだ話を通じあうには幼な過ぎると、きめてかかるところがあつたようだ。しかし、桑野は自分が小学校二年の歳頃を思い出した。桑野はその頃の自分の父親のことを克明に覚えていた。父のことが分つていたような氣がする。とすると、務もまたいまの桑野を見ていて、ずっと覚えているだろう。

桑野が小学校二年生のころは、もう戦争の末期であつた。学校で落ち着いて勉強が出来ない時代だつた。桑野の家は学校から近いところにあつたので、警戒警報が鳴るたびに、桑野は家に帰らされた。不器用でせっかちだつた桑野は、編上靴の紐を結えている暇が面倒だつたので、靴を背負つて家までゲートル巻きの脚で走つて歸つた。父は軍関係の精密器械工場に勤めていた。毎晩残業続きで、歸つ

てくるのが遅かった。桑野は灯火管制の暗い夜、空襲警報におびえながら父の帰りを待ち続けた。表通りの足音に蒲団の中で耳を澄まし、数をかぞえながら父をひたすらに待った。口の中で呟く数が百になれば父が家に辿り着き表戸を叩く、ときめて数をかぞえたがいつもそれは百を二つほど重ね、桑野はあきらめて寝入ってしまうのだった。父は残業をすると、特配のパンを持って帰ってきた。時にはまだ剛毛の残っている豚の生肉をぶら提げて帰ってきたりした。食糧の乏しい時代で、桑野は年中腹を空かしていたから、土産が魅力ではあったが、それより父の存在の温もりを恋しがっていた。昼間、たまに見る父は、あまり顔色がよくなかった。父はどちらかというと寡黙なほうだったから、桑野はその頃の父と話をしたり遊んだ記憶がない。話をしてみたくはあったが、何故かそう出来なかった。父はひどく疲れているのだから、話しかけてくれるのを待とう、と思ってもいた。そして、何かの折に、父が桑野に向きなおって話しかけたそうにしたときがあった。桑野は身の置場もなく途惑って、父を避けた。避けて数日が過ぎ、後悔をしたがもう機会はなかった。その父のもとに、召集令状が来た。父は遺書を書き、桑野の母にあずけた。どんなきっかけからだったか思い出せないが、母がその遺書を父の留守中に桑野に見せて、読んで聞かせた。便箋の間に、ひとつまみの父の髪があった。寡黙な父は遺書を書くにも簡略で、便箋は二枚きりだったが、遺書の末尾に桑野のことを繰りかえし頼んでいた。桑野は泣いた。その頃、戦争に行ったものは大抵死んで帰ってきていた。父も戦争に行けば間違いないと死ぬだろう、と思えた。幸いに、父は工場で無くてはならない働き手で、工場長の口添えがあつて兵隊に行かずに済むことになった。父は死なずにすみ、いまでも郷里で元気に働いている。桑野は今、ほぼ遺書を書いたころの父の年齢になっていた。いまは一応おだやかな時代

で、桑野は兵隊に行くようなことはない。したがって、父のように或る日息子に向きなおったり、遺書を書いて子供の行末を妻に頼みこむ必要も、まずないだろう。それでも桑野は務と話がしたかった。いま桑野は中年と呼ばれる年輩に足を掛けた。その矢先、病気になって流れの激みにいる。しかし、すぐに桑野はいままでよりもっと流れの激しい本流に、いやが応でも巻きこまれてゆくだろう。いつだってその気になりさえすれば話をする機会はあるわけだったが、早いほうがいい。何も特別に混み入った話をするつもりはなかった。混み入った話があろうはずがない。桑野は会社の仕事にとらわれていて、話をしたり遊んでやることが出来ないでいるが、務のことをまったく忘れてしまっているのではないことを知っていてもらいたかった。遠い或る日、どんな話であつたか忘れられてしまうにしても、思いあまつて真面目に向きなおった父のことが記憶の端に残っていさえすればよいのだ。ただそれだけのことだ。とはいえ、こういっただけは桑野があとで考えたに過ぎない。直接の動機は別なところにあつた。

桑野は夜更かしをするようになって初めて気が付いた。務が幼稚園に通うようになってから、桑野と久仁子は二階に上がり、子供には階下でひとりで寝る習慣をつけさせていた。そうされても務は淋しがるふうではなかったから、桑野はいい習慣を身につけさせたとはかり思っていた。が、桑野は夜起きているようになって、務に奇妙な癖がついているのを知った。務は毎夜枕許に桑野の小型ラジオを置き、スイッチを入れたままにして寝ていた。ラジオはボリュームをしぼってはあつたが、一晩中子供の耳許で鳴りつづけているのだった。これはよくない、これでは熟睡が出来ないだろう、と桑野は立ってベッドにそつと近寄ると、深夜放送のラジオを切った。すると務はほどなく眼を醒まし、う

ついにまたスイッチを入れなおしては寝込むのだった。

「いつから、あんなふうになった？」

桑野はテレビの深夜番組を見ながら、かたわらで編物をしている久仁子に尋ねた。隣の居間から、ラジオのディスクジョッキーが低く聞こえていた。久仁子は桑野が見ているテレビに興味がなくて、務が寝ながら聞いているラジオに耳を傾けていたようだ。久仁子は「なあに」とびっくりしたような顔になって聞きかえし、答えた。

「さあ、もう大分まえからよ」

桑野は淋しい気持になった。何かが、かしぎゆらいだような思いだった。

「どうして放っておくんだけ？」

「取り上げると、眠れないって怒るんですもの」

「困るじゃないか。なんとかしなくちゃ」

と桑野は強い語調で言ったつもりだったが、言葉にあまり力はいらなかった。務を人気がない階下に一人で寝かせている桑野と久仁子に原因があるように思えた。たとえ一人で寝かせたにしても、両親の気配が届くところであれば、務も安心してラジオを掛けずに寝ることが出来たのではないか。桑野は務の歳頃に、蒲団の中の暗闇で数をかぞえながら父の帰りを待っていた日のことを思い出し、これは特に自分に責任があることなのだ、とも思いはじめるようになった。そして孤独というものは、虫歯に似ているとも感じた。孤独は大人だけのものではなく、ずっと幼いものの心をも知らぬまに蝕ばみうがち、穴をあけてゆく。痛みに気がついたときにはもう遅い。桑野は夜起きていて、もうひと